



小説の未来 (17)

娯楽の進化

春日信彦

人間関係の考察

私なりの小説についての考え方を述べてきましたが、おそらく小説についての考え方は、各作家においてかなり違うと思います。共通していえることは、各作家が自分なりの世界観を読者に提供している点でしょう。

あくまでも小説は、作家が自分勝手に作り上げた世界ですから、読者も自分勝手に解釈し評論できるわけです。また、小説の世界がどの程度読者の精神・思考に影響を与えられたかは、もちろん未知なるものです。

ほとんどの小説において、主人公と家族との人間関係を中心として、主人公と社会とのかかわりが描かれています。簡単に言えば、小説の中心的テーマは、”人間関係の考察” といっていいのではないかと思います。

おそらく、親子、夫婦、友達、恋人、同僚、上司、部下、などの人間関係において誰しも悩まれた経験があると思います。誰にも相談できず悩み苦しんでいるとき、偶然出会った小説に元気づけられたというようなそんな経験をお持ちの方は結構多いのではないでしょうか。

小説は娯楽の一つではありますが、小説世界における人間関係の仮想体験を通して参考にしていただける点も多々あると思います。だから、そう意味においては実用性も兼ね備えていると言えるかもしれません。

妄想世界の小説は、当然、日常生活に役立つような具体的な実用性を提供するわけではありません。だからといって、役に立たないというわけではないのです。実用性はなくともちゃんと脳機能(精神)に役立つのが小説なのです。

小説の本来の役割は、日常生活に役立つ実用性の提供にあるのではなく、”感情、理性、運動生理を含めた脳機能(精神)の理解と有効利用の補助”にあるのです。私の小説は、この点を最重要視しています。

娯楽の必要性

人は、生まれながらに恐怖遺伝子を持っています。それは動物が身を守るための不可欠な遺伝子です。一方、生きている限り何らかの事象によって恐怖心が発生します。

そして、その恐怖心は苦痛を伴う悩みを引き起こします。そこで、誰しも苦痛から逃れようとして、苦しい気持ちを癒そうとして、いろんな娯楽麻薬に依存するようになります。

ご存知のヘロインのような薬物麻薬は即効性があります。だから、世界中で薬物麻薬に依存する人が増加しているのです。麻薬は、薬物だけではありません。すでに述べたように、長い歴史を持ち、数十億の人々が利用している精神的麻薬である宗教があります。

私たちは、痛みを伴う苦悩がある限り、痛みをいやしてくれる娯楽を求めます。例えば、宗教、ギャンブル、セックス、ヘロイン、酒、タバコ、音楽、スポーツ、ゲーム、映画、TV、書物など。

人の心から痛みを伴う苦悩がなくならない限り、上記の薬物的、感覚的、精神的麻薬もなくならないでしょう。ということは、小説の役目もなくならないと思っています。

小説の必要性

苦悩という物は千差万別といっていいのではないか。また、具体的な悩みは、無限にあるでしょう。だから、具体的な考察も無限にあることになります。

小説において苦悩を考察することは、脳機能（精神）を考察することになります。おそらく、脳機能の考察は医学の役割と思っておられる方がほとんどではないでしょうか。

確かに医学は物質的な脳とその生理的運動である脳機能を研究しています。でも、脳機能（精神）というものは、医学だけによって解明されるような代物ではないのです。

前述しましたように、宗教のような精神的麻薬などにおいて、理論的な解明ができないわけではないでしょうが、学術的な理論を用いた説明を行ったとしても、専門知識のない一般の人たちに納得いく考察をさせることはかなり困難と思われます。

そこで、小説の世界を利用せざるを得ないのではないかと思うのです。小説が必ずしも苦悩と精神的麻薬の考察に最適な方法といえるかどうかは疑問ですが、私としては、小説に頼っている現状です。

欲と大脳

ここで生きる上で不可欠な欲について確認しておきましょう。誰しも思いつくのが食欲ですね。人間は、生命を維持しようとする食欲の遺伝子を持っています。また、種族保存のための性欲遺伝子も保持しています。

食欲がなくなれば、衰弱死します。また、性欲がなくなれば、子孫を残すことができなくなってしまいます。つまり、この二つの欲を満たすことができなくなれば、人類は消滅します。だから、これらの欲を満たすために、生死をかけた精神活動が起きます。利害が対立すれば、殺人も起きることになります。

当然、人間以外の動物にも食欲と性欲はありますが、これらの欲が作用する脳機能には、人間と他の動物とでは大きな違いがあります。第一に言えることは、人間においては他の動物より高度に発達した大脳が働くということです。

大脳の中でも言語・記号を作り出す中枢が発達した人間の脳は、文化を創造してきました。また、同時に他の動物以上の破壊活動も引き起こしてきました。俗にいう、武器を使用した集団的争い、戦争です。

食欲も性欲も不可欠な欲ですが、特に精神文化と大きくかかわってきたのが性欲なのです。精神文化の基盤となっている宗教において、教祖は異なっていても性欲が大きく影響しています。

人間の性欲は、種族保存以外にも脳機能に大きな影響を与えています。そして、その作用を受けた精神は人間社会の形成に大きくかかわっています。例えば、政治、経済、宗教、法律、道徳、芸術、スポーツ、風俗、結婚、恋愛、など。

だからこそ、性欲についての考察は、科学においても芸術においても永遠のテーマといえるのです。また、性欲を考察することは、人間社会を考察することでもあるのです。

進化する娯楽

人類の存続において不可欠な脳機能として性欲と恐怖心を取り上げました。性欲は大脳に作用し、大脳は性欲を満たそうと機能していきます。また、性欲を満たす過程で、その障害となる事象に直面した場合、恐怖心が引き起こされます。

このように、欲が脳を活性化させながら、恐怖心をも作り出されていきます。恐怖心は苦悩を引き起こし、さらに、この苦悩をいやそうとする精神活動が生まれていきます。結果的に、数えきれないほどの癒しのための娯楽が創造されるのです。

視聴覚などから脳に伝達された情報は、大脳に作用し科学という精神を作りだしました。科学は文化の創造に寄与してきたことから、人類にとって最も崇高な精神とみなされるようになりました。

その反面、非学問的と思われがちな娯楽は社会的にはそれほど尊重されていません。でも、科学と芸術の融合から生み出される娯楽は、科学以上に進化しているのです。

世界中の大人から子供まで虜にしている感覚ゲームはますます進化し、それは娯楽の中心となり、喜怒哀楽を言語で楽しむ小説は、時代遅れの娯楽となりつつあります。

小説が娯楽としての役割を失えば、今後小説は消滅してしまうのでしょうか？おそらく、完全に消滅はしないでしょうが、娯楽として利用されるシェアは、かなり縮小されることは予測されます。

また、ゲームは賭博にも利用され、多くの人々を虜にしています。このように考えると、金銭欲を満たすことのない小説娯楽の未来は、明るいとは言えないでしょう。

しかしながら、小説には重要な使命があるのです。すでに述べたように性欲、恐怖心、娯楽、さらにこれらとリンクする国家の考察です。それは同時に、作家の使命でもあります。

小説に娯楽としての進化が起こり得るのか全く見当がつきませんが、いかなるものも有限であって無限でもあるのです。小説家の皆さん、小説の無限性に挑戦し続けようじゃありませんか。

有限と無限については、創造の中核をなす概念としてすでに述べましたが、もう一度わかりやすく以下述べておきます。

有限と無限

今一度、有限と無限について述べます。ある事象は、条件設定されることにより有限となり、条件を変更することにより無限となります。

例えば、完成された一つの家があるとします。今あるこの家は、依頼主の条件のもとに建てられた有限な家となります。さらに、依頼主が新たな条件を提出し、改築を行います。そうすれば、新たな家が建ったことになります。このように新たな条件を設定し続ければ、無限に新たな家に改築され続けていきます。

人間は生物としては有限であり物質としては無限です。言い換えると、人間は、脳死という条件が設定された時点で非生物となります。でも、たとえ死体が焼却されたとしても物質的変化は起きますが、自然界に物質としては存在します。

作家は、自分なりの条件を設定し、作品を完結させます。でも、新たな条件を設定すれば、作品は再構成され新たな作品となります。このように条件設定によって有限と無限が生まれるのです。